メッセージアウトライン
民数記21:1~35
「 仰ぎ見て生きよ 」

[1]「ネゲブに住んでいたカナン人アラドの王は、イスラエルがアタリムの道を進んで来たと聞いた。彼はイスラエルと戦い、その何人かを捕虜として捕えた」
「ネゲブ」…カナンの地の南部からツィンの荒野にかけての乾燥地帯。「アラド」…カデシュの北東約90キロメートルの地。「アタリムの道」…カナンの地とシナイ半島を結ぶ通商路であったと思われる。アラドの王は北上してきたイスラエルと戦い、その何人かを捕虜として捕えて行った。
ここで一気にイスラエル人の気持ちがくじけてしまってもおかしくないかもしれないが、今回は違った。かつての親の代のカナン偵察の時の失敗を繰り返してはならないとの思いがあったのかもしれない。
[2]「そこでイスラエルは主に誓願をして言った。『もし、確かにあなたが私の手に、この民を渡してくださるなら、私は彼らの町々を聖絶いたします。』」
　ここではイスラエルがあたかも一人の人のように表現されているが、これは国家としてのイスラエルであり、彼らはこのように思いを一つにして主に誓いを立てたのである。
「聖絶」…滅ぼし尽くして神にささげるの意。
[3]「主はイスラエルの願いを聞き入れ、カナン人を渡されたので、イスラエルはカナン人とその町々を聖絶した。そしてその場所の名をホルマと呼んだ」
　これは第二世代となってからの初めての戦いであるが、彼らは主なる神により頼んで戦いに出て行き、カナン人を打ち破ることができた。もちろん捕虜として捕えられていった者たちも解放されたであろう。彼らはその町を「聖絶する」(ハラム)ということばから取って「ホルマ」と呼んだ。これはイスラエルにとって幸先の良いスタートに思える。しかし、彼らはそのまま北上してカナンの地に侵入しようとはしなかった。
[4-5]「彼らはホル山から、エドムの地を迂回しようとして、葦の海の道に旅立った。しかし民は、途中で我慢ができなくなり、神とモーセに逆らって言った。『なぜ、あなたがたはわれわれをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。パンもなく、水もない。われわれはこのみじめな食べ物に飽き飽きしている』」
「葦の海の道」とは北の死海と南のアカバ湾とを結ぶ道。これは険しい山地の続くカナン南部から侵入することは得策ではないとモーセが考えたか、あるいはそのように主なる神の導きがあったからであろう。それで彼らはエドムの国の国境に沿ってモアブの国との境を目指して進んだものと思われる。しかし、例によって民は荒野の旅に我慢できなくなった。彼らは主により頼んでカナン人を打ち破ったのに、ここ

ではまた不信仰な姿に逆もどりである。彼らは荒野の旅の四十年間天からのパン「マナ」によって超自然的に養われてきた。水も行く先々で泉があったり、岩から水が湧き出したりと、神の配慮のもと不足することなく与えられてきた。肉が欲しいと言えば神はうずらを飛んでこさせるという方法で大量の肉を与えられた。それなのに彼らは親たちの世代と同じことを繰り返している。しかもマナについても「飽き飽きしている」と不平を言う。人間の欲望というものはとどまるところを知らない。彼らは神の配慮と守りと導きの中にありながら不平不満を言う。ここに人間の弱さ、愚かさ、罪深さというものを見る。そしてこれはイスラエル人だけではなく、すべての人間のもっている性質なのである。

[6]「そこで主は民の中に燃える蛇を送られた。蛇は民にかみついたので、イスラエルのうちの多く
の者が死んだ」

いつものようにモーセがとりなしをする前に、ただちに主のさばきが始まった。

「燃える蛇」…かまれると焼けるような激しい痛みを感じ、その毒が回ると死んでしまう恐ろしい毒蛇。この時、大量の毒蛇が荒野で宿営しているイスラエル人たちに襲いかかったのである。当時のことであるので血清などの有効な治療法はない。かまれたイスラエル人はバタバタと倒れ、死んでいった。もともとこの蛇は荒野に生息していたのであろう。それが今までは主なる神の守りがあったので、このような毒蛇に襲われるということから守られていたのであろう。神の守りが取り去られるとどうなるのか、神が怒られるとどうなるのかということを荒野の第二世代である彼らもまた味わわなければならなかった。

[7]「民はモーセのところに来て言った。『私たちは主とあなたを非難したりして、罪を犯しました。どうか、蛇を私たちから取り去ってくださるように主に祈ってください。』モーセは民のために祈った」

例によってイスラエルの民は神のさばきを受けて初めて自分たちが悪かったことを認めた。そしてモーセにとりなしを求めるのである。モーセは自分に逆らった彼らを拒否することもできたが、指導者として彼らを見捨てるようなことはせず、彼らのためにとりなしの祈りをした。

[8]「すると主はモーセに言われた。『あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上に付けよ。かまれた者はみな、それを仰ぎ見れば生きる。』」

主はモーセの祈りに答えてくださった。そしてその答えは民の願ったことよりもすばらしいことであった。彼らは蛇を私たちから取り去ってくださいと願ったのであるが、主はモーセが燃える蛇を作り、それを旗ざおの上に取り付けるように命じられ、民がその蛇を仰ぎ見るならば、蛇にかまれた者でも生きると言われたのである。つまり蛇にかまれて毒が回ってもう死ぬしかないような者でも、この旗ざおの上に付けられた蛇を仰ぎ見るならば死ぬことはない、助かる、いやされるというのである。

[9]「モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上に付けた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぎ見ると生きた」

なぜ旗ざおの上に付けた青銅の蛇を仰ぎ見ると死なないで生きることができるのか。理屈から言ってこんな理不尽なことはないであろう。疑り深い者たちは仰ぎ見なかったかもしれない。すると彼らは死んでいった。毒を吸い出そうと必死の努力をしていた者たちも倒れた。どう考えてもそんなことで助かるとは思えないと、仰ぎ見なかった者たちも倒れた。しかし、主が言われたように旗ざおの上の青銅の蛇を仰ぎ見た者たちは、たとえ蛇にかまれて瀕死の状態であったとしても死ぬことはなく生きることができたのである。

男も女も大人も子どもも、無学な者も賢い者も、力のある者も弱い者も、どんな人でもこの青銅の蛇を仰ぎ見たら生きることができたのである。これは不思議なことである。人間の思いを超えている。しかし、これが主なる神が示された助かるための方法であった。これは青銅の蛇自体に救う力があったというのではなく、神の約束を信じて仰ぎ見るということによって救われたのである。そしてこのことはまた、やがて来られる救い主イエス・キリストの予表的意味を持っていることも知っておかなければならない。

ヨハネの福音書3:13～15節でイエスは疑り深いニコデモに次のように言われた。

「だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです」

「人の子」とはイエスご自身のこと。「上げられる」とは十字架につけられて高く上げられることを意味する。この十字架につけられたイエスを仰ぎ見るとは、すなわちイエス・キリストの十字架の死は私の罪の身代わりであった。私を神のさばきとしての死と滅びから救うためであったと信じ、このイエスを救い主として受け入れることを意味する。そしてこのように信じる者はみなイエス・キリストにあって永遠のいのちを持ち、神のものとされ、永遠に至る祝福をいただくことができるのである。

毒蛇にかまれた者は誰でも旗ざおの上に付けられた青銅の蛇を仰ぎ見るだけで生きた。同様に罪と咎と汚れと悲惨の中で全身に死の毒を行きわたらせて、永遠の滅びに行かなければならないような者でも(それは地上のすべての人間がそうなのであるが)この十字架上のイエスを仰ぎ見る、すなわち自分の救い主と信じるならば救われる。これが神の約束なのである。

自分の知恵とか悟りとか修行などを通しては救いに至ることはない。

＜この後のイスラエルの進路＞

[10-13]「オボテ」エドムの国境沿いの死海の南の地⇒「日の昇る方、モアブに面した荒野にあるイエ・ハ・アバリム」エドムとモアブとの国境沿いの地。⇒「ゼレデの谷」エドムとモアブとの国境沿いの谷。この谷を流れるゼレデ川は死海南東端に東

から流れ込んでいる。⇒「アモリ人の国境から広がっている荒野にある、アルノン川の対岸」アルノン川はモアブとアモリ人の国境沿いにあり、やはり死海に流れ込んでいる。このようにイスラエルは死海の東側を北上して行く。
[14-15]それで、『主の戦いの書』にもこう言われている。「スパのワヘブとアルノンの谷川とともに、アルの定住地に達する谷川の支流は、モアブの領土を支えている。」
「主の戦いの書」…戦いの時に士気を高揚させるような歌が収録されていた書と思われる。
「スパのワヘブ」位置不明であるが「アル」とともにモアブの領土にあった。「アル」死海の東16キロメートルほどの地にあったモアブの町。
[16-18a]「彼らはそこからベエルに向かった。それは主がモーセに『民を集めよ。わたしが彼らに水を与える』と言われた井戸である。そのとき、イスラエルはこの歌を歌った。『井戸よ、湧きいでよ。あなたがたは、これに向かって歌え。笏をもって、杖をもって、君主たちが掘り、民の尊き者たちが掘り下げたその井戸に。』」
「ベエル」位置不明。ベエルとは「井戸」という意味で、主の命によりイスラエルはここで井戸を掘り、豊かな水が湧き出た。荒野を旅する民はいつも水の問題を抱えていたので民はこの井戸に深い印象を受けたようであり、この歌を作った。
「笏、杖」指導者の権威を現わす。「君主たち、民の尊き者たち」民の指導者のこと。
[18b-20]「ベエル」⇒「マタナ」位置不明⇒「ナハリエル」位置不明⇒「バモテ」位置不明⇒「モアブの野にある谷」位置不明⇒「荒れ野を見下ろすピスガの頂」死海の北端から東に約20キロメートルのネボ山の北西寄りの地と思われる。ここからカナンの地が一望できた。
[20-31]ここでイスラエルはアモリ人の王シホンにアモリ人の領土通過を願うが、シホンはそれを許さず、かえって彼とその民がイスラエルを迎え撃つために出て来たので戦いとなり、イスラエルは彼らを打ち破り、南のアルノン川から北のヤボク川までと東のアンモン人の国境までを占領し、それに属するすべての町や村に住んだ。これはイスラエルが最初に占領した地域となった。
「ヘシュボン」ネボ山の北約10キロメートルの地。アモリ人の王シホンの町
27~30節までの「詩(うた)のことば」はかつてはモアブの領土であったヘシュボンがアモリ人の王シホンに攻め取られたが、今度はそのシホンの王国がイスラエルに占領されたことを歌っているものである。「モアブのアル」死海の東約20キロメートルの地。モアブの領土。「アルノンにそびえる高地」もアルと同じ場所のことと思われる。
「ケモシュ」モアブ人の偶像神、「ケモシュの民」とはモアブ人のこと。
「ディボン」死海の東約20キロメートル、アルノン川の北5キロメートルの地。「ノファフ」位置不明。

「メデバ」ヘシュボンの南約10キロメートルの地。
[31-32]「こうしてイスラエルはアモリ人の地に住んだ。そのとき、モーセは人を遣わしてヤゼルを探り、ついにそれに属する村々を攻め取り、そこにいたアモリ人を追い出した」
「ヤゼル」シホン王国の北部、ヨルダン川の東約20キロメートルの町。
[33-35] さらにイスラエルは北上してバシャンへの道を上り、バシャンの王オグがそのすべての兵とともに彼らを迎え撃ちにエデレイへ出て来たがイスラエルは彼らと戦い、これを打ち破り、その地を占領した。
「バシャン」ヨルダン川東岸の北部一帯の地。「エデレイ」ガリラヤ湖南端から東へ約40キロメートルの地。
このようにイスラエルはヨルダン川東岸の先住民族を打ち破ったが、それは単に武力による制圧ということではなく、主なる神がイスラエル人を用いてアモリ人やバシャンの王国の長年にわたる神に逆らう罪深い生き方をさばかれたのである。そしてヨルダン川西部のカナンの地に住んでいる民たちもやがて神のさばきの器としてのイスラエルによって滅ぼされることになる。→創世記15:12~21
イスラエル人たちがエジプトに滞在している年月のうちにアモリ人やカナン人たちの罪深い生き方が頂点に達し、その咎が満ち満ちて来る。そして最悪の状態に達したカナンの地の民を主はご自身の民としてシナイの荒野で訓練され、育てられたイスラエルを通してさばかれるのである。これが神のご計画であった。
　神はさばきを実行に移されるまで実に長い期間を忍耐して、罪の中にある人々が悔い改めて神に立ち返るのを待っておられる。しかし、それでも悔い改めないのなら、ついに神はご自身が義であるがゆえに悪をそのまま見過ごさずにさばきを下されるのである。神はこのようにしてカナンの地の民を滅ぼされるが、今日、神はかつてと同様に人間の罪深い生き方を忍耐して、彼らが悔い改めてご自身のもとに立ち返って来るのを待っておられるのである。→Ⅱペテロ3:9
神はそのためにすでに御子イエス・キリストをこの世に人として送られ、その十字架の贖いによって救いの道を開いてくださった。今や誰でもこのお方を自分の救い主と信じ受け入れる者はモーセの青銅の蛇の時と同じように救われ、神のさばきを免れ永遠のいのちをいただくことができるのである。→ヨハネ3:13～16